

## ランビル丘陵の植物相と多様性

永益英敏（京都大学総合博物館）

ランビル丘陵はサラワク州の東部、ブルネイとの国境近くに位置する、面積 6949ha の小さな国立公園である。最も標高の高いランビル山でも高さ 465m にすぎず、公園の大部分は西マレシア地域の代表的な湿潤低地熱帯雨林植生である混合フタバガキ林で覆われ、東西に延びる山陵の北側を中心にケランガス植生が広がっている。

この地域は西マレシア地域の混合フタバガキ林においても最も樹種多様性の高いリアウポケットと呼ばれる地域の一つである。ランビル国立公園の中に設置された面積 52ha の永久方形区における胸高直径 1cm 以上のすべての木本 36 万本の調査結果によれば、1225 種の樹種が生育していることが明らかになっている (Ashton, pers. com.)。ランビル丘陵が陸化したのはわずか 160 万年前というが、この異常ともいえる高い  $\alpha$  多様性は、一つにはリアウポケットが新生代における熱帯雨林のレフュジアであったらしいことを反映しているからだという。ランビル丘陵で新属新種として発見された *Tamijia flagellaris* はショウガ科の中でもかなり変わったものだが、ランビルとブルネイにしか分布しない。このような植物の存在もレフュジア仮説を支持するものといえよう。

また、ランビル丘陵では砂岩と頁岩が交互に現れるが、この土壤条件の違いによって、樹種の生育が大きく異なっていることも分かっている。ランビル丘陵の林冠調査ために設置された 8ha と 4ha の永久方形区はそれぞれ粘土質、砂質の土壤が多い。胸高直径 10cm 以上の樹木について調査したところ優先する樹種にもかなり違いがあることが分かった。さらに成熟した森林であることや、小さいながらも急峻な崖地が多数存在することも林分構成のモザイク化を促し、高い  $\alpha$  多様性につながっているものと思われる。

ランビル丘陵の植物はサラワクでは比較的よく調査されている方だが、けして十分とはいえない。Soepadmo et al. (1984) は 1982-84 年に行われた調査に基づき、684 種を報告している。Nagamasu & Momose (1997) では 1153 種が挙げられているが、まだ 52ha の樹種数にも及ばない。リストの改訂を進めているところである。また、ショウガ科など重点的に行われた分類学的な研究によれば、ランビル丘陵にはまだまだ数多くの未記載種が存在していることが明らかである。